



## 第3回 電子ペーパー DPT-RP1はいいぞ

個人的に事あるごとに周囲に薦めている電子ペーパー「DPT-RP1」(ソニー)を紹介する。

移動中などに論文を読んだり設計・実装のためのポンチ絵を書いたりすると、電子ペーパーは何かと出番が多い。iPad等タブレットでもよいかもしいないが、液晶ディスプレイ製品と比べて電気泳動方式のディスプレイは、

- バッテリー駆動時間が段違いに長い
  - カラーディスプレイではない
  - 応答はやや遅い(後述の前世代機より速くはなっている)
  - 紙にかなり近い書き味
- といった特徴で用途は差別化される。

## ◆前世代機「DPT-S1」

元々、筆者は前世代機である「DPT-S1」を利用していた。当時、ほかにも電子ペーパー製品はいろいろあったのだが、小説や漫画を読むためのようなややコンパクトな端末が多く、A4サイズで論文1ページを原寸俯瞰したいとかルーズリーフやチラシ裏に対する落書きといった用途にはあまり向いているとは言えなかった。そのような中で、A4サイズ電子ペーパーとして「DPT-S1」の性能は輝いて見えたものだったのだ。ただし、当然他機種に比べ割高でもあった。発注して届いた箱には「業務用」と記載されており、もしかしてあまりコンシューマ向けに売らなかつた?と感じたくらいである。

## ◆紙に近い書き味

現行機としての「DPT-RP1」は「S1」のディスプレイサイズはそのままに、ページ捲りの応答速度等、大幅に性能が改善した。本シリーズで特筆すべきは書き味の良さだと思っている。ペン先もいくつか選べてある程度好みの書き味を選択できたりもする。そのかわり、筆圧の強い人はペン先の減りはそこそこ速いと感じるかもしれない。筆者は筆圧が弱いので大して気にはならないのだが、姪に取り上げられてお絵描きに使われた際、ペン先によってはかなり消耗することが確認された。

## ◆データのやりとり

閲覧・書き込みできるデータはPDFファイルであり、その交換は、PCやスマートフォン上の専用のアプリを通してBluetooth等で行う。「S1」のときと比べ、有線接

続やWebDAVサーバ設定が不要になった点は便利だ。反面、専用アプリのインストールが必要になった点が少々面倒ではある。特に専用アプリにLinux版がない点はマイナスかもしれない。スペック的に製品が最も刺さるであろう研究開発職では、特に計算機分野であればそこそこLinuxをメインに使用するユーザはいるはずである。実際、同機を購入した同僚もこの点で困っていた。

## ◆サーベイや執筆との相性

「DPT-RP1」は、A4資料の閲覧に向き、書き味は紙と比べても違和感がなく、長時間の駆動に心配がない。すなわち、論文の閲覧に向き、そのまま論文にメモ書き(サーベイなら思考のため、執筆なら校正など)をし、その作業を移動中にも電源の心配をせずに行い続けられる継戦能力がある。できること/できないことを考えると最早専用機と言っても過言ではない。デバイス自体の軽さも移動中の運用には優しい。

## ◆開発作業との相性

開発において便利なのは「メモもできるサブディスプレイ」として運用しながら実装・実験を行う際である。作業において少なからず資料(論文やハードウェアファレンス)を見ながらの作業は必要になる。見るだけで済むならデュアルディスプレイでもよいが、思考の補助としてよく図の書き込みをしたくなったりする。紙に印刷というのも今時どうかという話であるしそもそも携帯や書き直しに対して不便すぎる。選択肢は液タブや製品のようなものとなり、総合的な理由で筆者は「DPT-RP1」を選択している。

論文やリファレンス等の脳を使わされるPDF資料にたくさん触れる機会があるような方にはぜひ薦めたい。逆に電子書籍フォーマットや電子書籍アプリ等に対応しているわけではないので、一般に販売されている電子書籍を読むには向いているとは言えないだろう。電子書籍リーダーとは明確に一線引かれている。8万円程度と気軽に買えるような価格の製品ではないが、それだけの価値はあると考えているし、何よりこのコーナーは「買い物自慢」なのだから多少高くついてもよいのである。

(2019年4月15日受付)